

# 今なお、心が揺れる

三木 俊平

甥の問いかけ

おととしの夏、妻・佐和子の実家に立ち寄った折、「おじちゃんは、地元の人たちが『住めば都』と言っている田舎の家はどうするん？」と、甥に不意に訊かれた。「うーん。おじちゃんは、一か月はなんとか辛抱できる。でも、二か月経つと田舎の生活に飽きる。そして、三か月すると、ムラの人たちがもう向うに帰ってくれと言うやろ」と、冗談めかしながらとっさに答えた。

帰郷について、これまで人前では口にしたことがなく、僕にとってはいわばタブーに近いものであったが、この甥への返答は、心の中でずっともやもやしていた僕の本心であった。

生まれ育った「ふるさと」

全国の中山間地域では、長年にわたって地域活性化対策が立案され、各地でひたすら取り組みが進められてきたが、必ずしも人びとが期待し、社会が目指したようにはならなかった。

僕の「ふるさと」は、全国でおこなわれた『昭和大合併』にあわせ、昭和三一年九月、三つの村が合併して人口九六〇〇人で発足した。爾来、半世紀余りにわたり、多くの人々が故郷の振興に尽力し、中でも温泉開発が成功し、一時は県下で村おこしの優等生といわれたこともあり、出身者の一人として、大いに誇りに思ったものである。

しかし、残念ながらいぶん以前から、年平均五〇人以上の人口が減少する「自然減社会」を迎え、平成二四年九月一日現在、人口は四八〇〇人と半減。高齢化率は三七％に達し、既に三〇年後の日本を体現している。

過疎化・高齢化・少子化により、僕のおふくろのような一人暮らしや高齢者二人世帯は増え続け、空き家も目立つようになって、行政も支援する「空き家バンク」

ができています。また、母校の小学校は、僕たち団塊の世代が在学中は全校生徒数が二百人を超えていたが、最近では二〇人台にまで落ち込み、平成二四年四月からは、完全複式学級となってしまった。

地域の人びとのひたむきな努力により、田んぼの耕作が続けられているものの、雑草が生い茂る耕作放棄田や畑、手入れの行き届かない里山なども目につき、誰しもの予想を大きく超える人気のない、寂しい風景が広がっている。

#### 核家族

地方出身者の多くは、大学卒業後、都会でそのまま就職するのが当たり前という時代風潮のなかで、僕は、昭和四七年四月、県庁に就職した。

就職して三年目。同期の友人から「おまえなら大丈夫や。俺の妹はどうか」と結婚を勧められたこともあったが、田舎の「家」や両親のことも念頭にあり、昭和四九年五月、職場の知人の紹介で同郷の佐和子と結婚。

僕も佐和子も、結婚にあたって約束をしたわけではないが、若いうちは都会で暮らし、定年前後になれば、いずれ「ふるさと」へ帰るものと、漠然と思っていた。

一方で、僕には、何かにつけて介入する祖母のわがままに、家族のみんなが振り回される三世同居や、他人の家にどかどかと土足で上がりこんでくるような田舎特有のうんざりする親戚との付き合いなど、親子四人の団らんそっちのけの、今も思い出したくない苦々しい体験があり、子どもの頃から「核家族」への強いあこがれを持っていた。

#### 『親子四人のふるさと』

昭和五二〜三年、二人の子どもが二〜三歳の頃、県営住宅に住んでいたが、階下の住人から「夜、いつまでも騒がせて、どんな教育方針なのか」と怒鳴り込まれたことが何度かあった。それを機会に、とにかく夜九時になったら、子どもたちが眠くなくても、寝付かせることにする気遣いな毎日を過ごしていた。

また、昼間もなるべく家にいたくないからと、佐和子はおむつを抱えて自動車学校へ通うことにし、いつもは、その保育室に子どもたちを預けていたが、時には、子どもたちがむずかるために、教官に前代未聞と呆れられながらも、後部座席に二人の子どもを乗せて、教習を受けることもあったりした。

こんな少し窮屈で嫌な思いをする生活を続けている折、僕と同じように、田舎の長男ではあるが、神戸、大阪に就職している二人の従兄弟が、それぞれにマイホームを購入したことを知った。このことは、「長男でもこっちで家を買ってええんか」と、僕や佐和子にとって「目からうるこ」の出来事であった。

こうした事情や背景もあって、昭和五四年七月、「三木さんの家は気をつけていないと通り過ぎてしまう」と、知人から冷やかされるほどの小さな家ではあったが、昭和四〇年代半ばから新興住宅地として開発され、発展してきたM市に、思い切つてマイホームを購入した。

就職して八年目、三二歳。給料本俸が約一四万円、住宅ローンが約三万八千円と、購入後しばらくは経済的に余裕はなかったものの、佐和子の懸命な家計のやりくりに加え、日本の社会が依然、昨日よりは今日、今日よりもあした、あさってへと活力が湧いてくる発展過程にあり、毎年、少額ながらも給料が上がり、毎日の生活に希望の持てる状況にあった。

僕は仕事に、佐和子は家事、子育てに、それぞれ多忙であったが、幸いに健康。階下への気兼ねから解放された佐和子は、安堵の笑顔を見せ、子どもたちも家の内外を元気に走り回っていた。

ある日、子どもたちは、兄弟で一つの水着バッグを持ち水泳教室に通っていたため、同級生の女の子から、「あんたらの家、貧乏でしょ」と言われたこともあったが、二人は、「それがどうしたん」と気にする風もなく、伸び伸びと育ち、家族四人、ささやかな幸せも感じながら暮らしてきた。

そして、年に何回かの帰省の後、M市の自宅に近づく、毎回のように夫婦のどちらかが必ず「わが家に帰って来たなあ」と口にするように、この三三年の間にM市は着実に、僕たち『親子四人のふるさと』になっていった。

#### ムラ社会と自分の性格

僕は両親が健在な頃より、「ふるさと」への愛着と、半ば長男としての義務感から、およそ二か月に一回の頻度で行われる春・夏・秋の祭りの準備、農道や生活道路の補修、堤防の草刈りなど、ムラの使役にはできるだけ都合をつけ、参加してきた。

平成一九年一〇月に父親が死亡し、おふくろが一人暮らしになって以降は、ムラ社会のなかでおふくろが肩身の狭い思いをしないように、ほとんどの使役に参加す

るようにしてきた。

この使役終了後に行われる懇親会の席で、ムラの人たちから「いつ帰ってくるんや？ そろそろ帰郷して、ムラの役員やお寺・神社の世話役などを引き受けてほしいなあ」と言われることも一度や二度ではなかったが、僕はそのつど「現在、熟慮中」と答えをはぐらかしてきた。

しかし、僕は、地区の運営や共同作業の仕方などに見られるように、ムラの人たちのまどろっこしく、メリハリのはっきりしない日常の性向や暮らしぶりと、何事にも性急で、白黒をつけたがる自分の性格とは歩調が合わず、また、ムラ社会に何か気持ちが悪くわなないことを、この使役や懇親会に参加するたびに痛感していた。

「今なお、心が揺れる」

『親子四人のふるさと』となったM市は、近年、少子高齢化が進み、平成二四年九月末現在、高齢化率は三六％に上昇。東京や大阪など全国各地で開発された大型住宅団地と同じように、オールド・ニュータウンと呼ばれるようになり、臨海都市部への主要な交通機関であるK電鉄も、学生やサラリーマンの減少で、乗降客は、平成四年度のピーク時に比べ、現在は半分にまで落ち込むなど、今後の発展が必ずしも見込まれない状況にある。

しかし、これからの自分たち夫婦の健康のこと、子ども夫婦や孫たちとの行き来、日常生活の利便性、近所や友人との付き合い、また、一年を通して比較的温暖な気候、青い空や清々しい空気など、あれこれいろんなことを考え合わせると、完全リタイヤ後の『自分の居場所』はやっぱりここだなと思う。

そう思いつつ、一方で、自分の生まれ育った「ふるさと」を離れることに、ふつと寂しさを感じ、また、誰に対してということではないが、ある種の申し訳なさいたいなものも感じることもある。

時々、テレビ番組に合わせ、文部省唱歌「故郷（ふるさと）」を歌うことがあるが、一番、二番と歌い進むにつれ、なぜか突然ぐっと胸に迫るものがあり、恥ずかしながら涙ぐんでしまうことが、最近は多くなっている。

「帰郷か。離郷か」

何度も何度も問い返し、自分の気持ちはしっかり固まっているはずなのに、二つの「ふるさと」への思いが時として交錯し、僕の心は今なお、揺れるのである。